

本報告では、社会の複雑さや異質性を数字で表現・記述する際に生じる数量化のジレンマとその含意について考察する。社会人類学の広範なデータセット（Ethnographic Atlas）が自分野で敬遠されつつも、近年、開発経済学や政治学でリバイバルしているという「ねじれ」を出発点に、人文学・哲学が重視する概念の「つながり（ホリズム）」と、数量化がもたらす対象の「ぶつ切り」との対立を整理する。数量化は個々の文脈的意味を捨象するが、予測や因果推論、あるいは制度の円滑な運用においては極めて有用である。他方で、合計特殊出生率（TFR）やGDPなどのマクロ指標は、単なる客観的事実の反映ではなく、数え方の基準をめぐる高度な質的決定の産物である。数字と対象が単純に対応しているという素朴な前提を問い直し、数量的記述が持つ妥当性・目的・機能の関係を再考することで、「数字が語りえないこと」を体系的に考察する視座を提示する。